

【研究ノート】

福澤諭吉と東三河の近代化、そして愛知大学初代学長の林毅陸 ーオープンした福澤記念慶應義塾史展示館見学に寄せてー

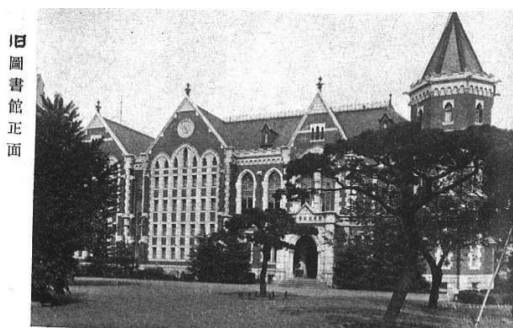
愛知大学名誉教授（地理学）、愛知大学東亜同文書院大学記念センター・元センター長 藤田 佳久

1. はじめに

本年度の大学史協議会東日本部会は、2021年12月16日、東京三田の慶應大学で開催された。テーマは同年5月にオープンしたばかりの「福澤諭吉記念慶應義塾史展示館」の説明・展示会であった。コロナ禍であったが、年末はその勢いが弱まった時期にあたったせいか、直接の参加者数は30人を数え、オンライン参加者も30人あり、年度末ではあったが関心の高さがうかがえた。本学の東亜同文書院大学記念センターからは、筆者のほか、石田卓生氏と伊藤綾子氏が参加した。筆者は別件でこの少し前の11月に同館を訪問するチャンスがあり、2回目の訪問となり、色々思うところもあったので、以下小文で書き記してみた。

2. 「福澤諭吉記念慶應義塾史展示館」について

福澤諭吉が創設した慶應義塾には、すでに福澤を顕彰・研究する「慶應義塾福澤研究センター」が設置され、多面的にも顕彰・研究する機関として活動してきたことはよく知られている。筆者のいる東亜同文書院記念センターでは、文部省の支援を受けて立ち上げた「オープンリサーチセンター」（2006～2010年度）、とその後の同省支援の



（写真A） 『慶應義塾75年史』より

次期プロジェクト（2012～2017）では、この慶應義塾福澤諭吉センターと提携させていただいたことがあった。戦争直後、中国上海から引き揚げてきた東亜同文書院大学最後の本間喜一学長が中心になって設立した愛知大学の初代学長に慶應義塾塾長の経験を持つ林毅陸氏が就任されたからである。提携は、その時期に福澤研究センターが学内での移転事業中であり、当方からのアプローチを遠慮したことなどもあって、中途半端に終わってしまったことは残念であった。しかし、そのような中、福澤研究センターの西沢尚子教授、また同センター所長を経験された坂井達郎名誉教授にはご迷惑をかけたつつ、大変お世話になったことがあった。特に、坂井名誉教授には、愛知大学文学部在任中の経験を踏まえ、創設期の愛知大学について愛知大学へ来訪され、講演をしていた

だいた。

今回の大学史協議会では、福澤諭吉研究センターの都倉武之准教授が、この展示館の開設に至る経緯と展示の特性、その際、展示の分類ほか留意したことなどについて1時間ほど講演された。詳細は省くが、福澤諭吉センターの発足に比べて、展示館設置が大幅に遅れたことについては、従来繰り返し展示館の構想を義塾の執行部に提案してきたが、学生数の増加の中で教室が足りなくなり、教室利用が優先となり、展示館構想は実現しなかったという。確かに洪積台地の一角にある三田の丘は狭く、愛知大学豊橋キャンパスの四分の一程度であり、建物も混み合っている。そんな折、明治45年に創立50周年の寄付で建設され、華麗な姿を見せ、国の重要文化財にも指定されている図書館の旧館(写真A)が免震化工事で改善され、その2階の会議室を利用することで展示館の開設が可能になったのだという。天井には大きなシャンデリアがつるされ旧会議室の名残が見られ、広い空間をいくつかのブロックにまとめ、入口から順に展示を時間軸で見せている。入り口では義塾史のビデオが流れ、次いで「諭吉の出発」、「諭吉による文明の創造と学問の力」、「諭吉の独立自尊と私立の矜持と苦悩」、「義塾と社会とのつながり」などのテーマが続き、さらに展示の一角には戦時中に数千人の義塾関係者が犠牲になった学徒出陣者たちのタッチパネルが目をつけた。戦後史については戦後のさわりだけで、全体としては福澤中心のまさに戦前を中心とした義塾史中心の展示となっている。各コーナーの遺品展示のほかでの大きな特徴は、諭吉のいわば名言を言葉と文字の力として展示したところ

にある(写真B)。



(写真B) 文字力の展示

そこに諭吉の本領があるという解釈であろう。文字の力を表や図、絵などを用いて興味深く示し、参観者にメッセージとして伝えようとしている。もう一つのタッチパネルは諭吉に関係の深かった人物の写真群で、タッチにより関連情報が見いだせる工夫がされている。なお、入口を出た小部屋の企画展示室には、義塾にかかわりのある貢献した人物の揮毫などが飾られ、愛知大学学長になったという説明付きで、林毅陸の力強い揮毫による福澤の至言である「独立自尊」が大きく飾られ、林毅陸も福澤の志を継承した立場を強く表明したように伝わってきた(写真C)。

このあと、三田キャンパス内の見学会があり、多くの文学碑、演説館、小ホール、そして旧図書館最上階鉄骨の被災状況やその表側で正面の校章の戦災による破損の名残の遺構などの歴史的環境を訪ね、庭にいくつも作られた学徒出陣にまつわる男性像の彫刻など、戦争の記憶も大切に保持しているスタンスがうかがわれた。



(写真C) 林毅陸書「独立自尊」
(為函館三田会)

3. 福澤諭吉・義塾と東三河の近代化

(1) 義塾と「宝飯中学校」の開設

福澤諭吉が明治の文明開化に果たした役割は大きく、明治2年(1869)に刊行された地理の教育啓蒙書で、外国体験も踏まえ、世界の国々を紹介した『世界国尽』全6巻は、国民の間でベストセラーになり、明治を通して長く読まれた。すでに幕末に漢学、儒学はもちろん、蘭学、さらに独学で英語を学び、幕府の翻訳局に努めていた福澤は、幕府派遣の外国使節団にも重ねて加わり、欧米の見聞を広めていた。それらを踏まえ、現地での日記記録を整理したのが幕末から明治にかけての『西洋事情』10編の刊行で、日本人が知らなかった文明国のリアルの様々な政体を紹介し、その法治による自由、平等、教育、宗教、医療、産業、技術などの市民国家の様々なシステムを紹介した。また『学問のすすめ』はそれらを踏まえ、従来からの儒学ではなく、実学を広め、国民をレベルアップし、貴賤や門閥の別なく独立自尊の価値を主張した。

このような過程で幕末に作った蘭学塾をベースに、慶應義塾へと展開し、のちに私学では日本初の大学開設への基礎ができた。

明治の文明開化の風潮は、当初の義塾が各藩出身の武士の学問所となったが、明治以降、次第に福澤の思想に感化された平民層が多くを占めるようになり、理想に燃えた若き学徒や名望家などが福澤諭吉の義塾を求めて全国から参集するようになった。そこで学んだ塾生たちが出身地へ戻り、各地で新たな学校などを開設する動きが見られた。今回、新たに開設された慶應義塾史展示館のコーナーの一つには、そのような塾生たちの各地での軌跡が全国地図の上に示されていた。その一つが愛知県東部の東三河の地に示された「宝飯中学校」の誕生紹介であった(写真D参照)。

この「宝飯中学校」設立のきっかけは、まさに慶應義塾生であった阿部泰藏が1881年(明治14)の東三河へ帰郷したとき、義塾出の実兄の武田純平と前芝の豪農でやはり義塾出身の加藤幸三郎、さらに竹本宝飯郡長らと相談し、小学校の教育は普及しつつあるが、そこを卒業した生徒たちのさら

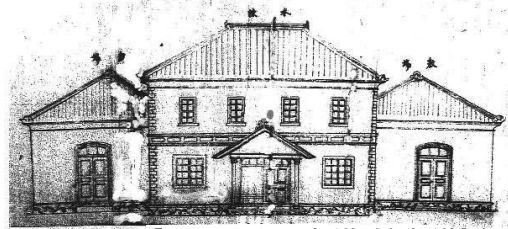


(写真D) 塾生たちの活躍地

なる学びの場がないということで、新たに「宝飯中学校」を設置し、若い学徒たちに教育機会を当てようと働きかけ、提案した。そこで合意ができると、宝飯郡下のすべての村々の村長である戸長からも寄付金を募り、宝飯郡立の中学校として設立することになった。場所は国府（こう）で、古代律令時代の国分寺や国分尼寺が建立された歴史的場所で、明治初期には漢学と皇学を教える修道館が短期間ながら立地した場所でもあり、選ばれた。

当時の宝飯郡は豊川下流の北側にあたる右岸一帯の地域で、豊川河口の前芝（漁業、港、醸造、ノリ生産）、三河湾沿岸の三谷（船舶輸送の拠点）、豊川を少し遡ったところの、対岸の旧吉田（明治以降豊橋と改名）の町と対向する位置にある下地（豊川上下流の船による物資の集散地で上流から筏で流下する木材の加工地でもあった）、牛久保（鋳物加工業、木工家具）、国府（市場町）、豊川町（豊川稲荷の門前町）などが分散的ながら各拠点をつくっており、この宝飯地方の経済活動は対岸の旧吉田（豊橋）圏を上回っており、近世以来の経済活動が活発な地域であった。そこに例えば三河湾のノリの生産力をアップし、のちには「浅草ノリ」供給源になる養殖技術を確立した前芝の空野甚七のような先覚者が各地に現れ、豪農や産業資本家など地域の指導者たちがいた。そのような彼らに福澤門下生の阿部泰藏による地域教育の近代化提案が響いたのである。いわば東三河近代化の幕開けであった。

こうして宝飯郡地域の豪農や伝統的ではあるが産業資本家たちのリードで、宝飯郡全体からの寄付金が集まり、国府町の一角に郡立の「宝飯中学校」が開設され、進学先



宝飯中学校新築五十分/経略 『三河ではじめての中学校 宝飯中学校』より
(写真E)

のなかった宝飯郡下の子弟にその道を開く全国でも先駆的な例となった。初年度の募集には約 100 名の入学生があり、その期待がいかに大きかったかがうかがわれる。入学生の増大を見越して引き続き新校舎が建設された（写真E）。当時愛知県内には中学校は名古屋に 1 校できたばかりでありであり、三河初の中学校となった。

教員には慶應義塾からの教員も参加し、福澤諭吉も見学を訪れている。義塾のそして地域のリーダーたちの意気意気込みは、教育内容にもあらわれていた。教科書はほとんど英書であった。中学校の存在は全国でも極めて少なく、当然教科書はなかったも同然で、そこに先進欧米国の各教科の英書が導入されたと思われ、福澤門下生ゆえに可能であったといえる。筆者はその教科書を『豊川市史』編集時に見せてもらったことがある。筆者が参考にみた「地理」科の場合も、教科書は地図や絵も含んだ厚い英書であった。各教科のこのような英語版の教科書は、福澤が数度にわたって欧米に派遣に出かけた際に膨大な外国書を買って求め、そのような情報がなければこのような展開にはならなかったであろう。問題は小学校卒の新入生が、いきなりこのような英語版の教科書をこなせたのかという点である。そこには福澤が蘭学を学び、さらに英語は独学でマスターしたという経験が採用されたように思われる。つまりほとんどの

教科が英語版であり、英語漬けの中で、生徒たちはその中に飛び込み泳いだということであろう。実際、義塾からは英語教育にたけた校長を兼務した渋江保ほかの教員らが参加した。同様な事例は青森県弘前の東奥義塾にもみられた。ここでは海外から招かれた宣教師たちが教鞭をとり、やはり英書の教科書を用いた。のちにいったん閉校になるが、やがて復活し、今日まで継承されている。

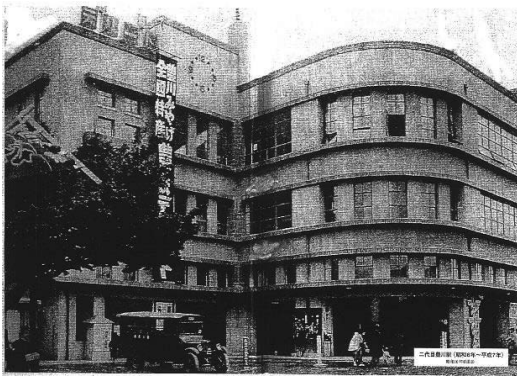
しかし、1886年(明治19年)、時の森有礼文相は1県1中学校制度をうちだし、県立以外の学校を排除した。中央集権方式で、福澤が最も嫌った体制である。結局、これにより実質郡立であった「宝飯中学校」は廃校の憂き目にあい、この地域の教育近代化を願った郡民とその指導者たちの夢は砕かれてしまった。それは福澤が最も強く願った教育の近代化構想が、新生明治政府の中央集権化の中で足踏みした瞬間でもあった。このような事態を受けて、その後の福澤は私学の誇りと自信を持ちつつ、私学の確立のために苦悩し工夫奮闘することになる。なお、「宝飯中学校」は、後に生まれた官制の高等小学校へ形の上では引き継がれたとされている。

一方、こうした「宝飯中学校」の誕生は、地域の指導者はもちろん、地元住民にも福澤の存在を日本の近代化とのかかわりで理解させたように思われる。それはまた、福澤を通して義塾との関係にも及んだように思われる。前述の「宝飯中学校」を提案した義塾卒の阿部泰藏は、日本で最初の生命保険会社である明治生命保険を創設し、敗戦後、地元豊橋の都心に8階建ての会社ビルが建設された。それらの影響もあって、豊橋財界

の流れの中に義塾とのつながりも継承されているように見える。それが戦前からこの地域が先駆的な構想を議論するという伝統が継承され、期待されたように思われる。話は飛ぶが、戦後、上海から本間喜一学長の指導の下、旧制大学である東亜同文書院大学の豊橋への立地、開学を地元財界指導者たちが歓迎してスムーズに受け入れたのも、このような義塾の流れがもたらしていたこの地域の先駆的構想をめざし議論する伝統性がベースにあったように思われる。

(2) 豊川鉄道の開通

「宝飯中学校」は国の政策によって廃校という憂き目にあい、志を折られた地元のリーダーたちであったが、そのまま討ち死にしたわけではなかった。そのエネルギーを次に交通の近代化への投資に向けた。それが1897年(明治30年)の私鉄豊川鉄道の開通となって実現し、吉田駅(豊橋駅)と豊川稲荷のある豊川駅をつないだ。蒸気機関車も輸入している。最初は、前述した豊川(とよがわ)沿いの流通拠点である下地を出発駅とし、豊川沿いの沖積低地にルートを設定する予定であったが、それより前に開通した東海道線が豊橋駅の拠点性を高めたため、そこに折から伸線計画のあった愛知電鉄と共同で吉田駅を建設、線路を共用する形をとり、しかもルートは沖積低地の洪水を避け、小坂井段丘上のルートに変更して、吉田と豊川を結んだ。そこに当時の指導者たちの先見性をうかがえる。この豊川鉄道はさらに延伸して鳳来寺鉄道とつなぎ、一方伊那谷から南下して天竜峡まで延伸してきた伊那電気鉄道との両者をつなぐ三信鉄道で結び、諏訪湖の辰野と豊橋をつなぐ



(写真F)
豊川駅(ターミナルビル)『豊川市史』近代編より

一大「三信鉄道」の誕生となった。会社はすぐに観光路線をアピールして次の時代に臨もうとした。

ところで、豊川鉄道がベースになって、奥地への延伸が進む中で、豊川鉄道は全国でも先駆的で画期的な事業を実現した。その一つは当初の豊川駅のターミナル化であった(写真F)。駅としては他に例のないほどの鉄筋3階建ての当時としては大規模なターミナル駅を建設し、1階は駅の機能、2階は百貨店、3階にはホールが設けられ、映画演劇場とした。この企画は同時期に関西の鉄道利用をリードした阪急の小林一三の構想に匹敵した。小林一三は阪急沿線の宝塚に公園と劇場を作り集客をしたが、豊川鉄道も豊川に北接する長山駅を中心に広大な公園を開発し、動、植物園を始め、グラウンドやプール、ホールまで作り、集客を図った。いずれも戦前の段階でこのような先駆的で、斬新な構想を実現したことは画期的なことであった。この時代の豊川鉄道をめぐるリーダーたちの時代の先を見る目は、「宝飯中学校」設立の構想に重なり、その背景には義塾の影響を見出すことができる。

ところで、こうして完成した豊川鉄道をベースとした伊那谷もつなぐ「三信鉄道」

は、新たな観光路線として構想されて、それが動き出そうとしたとき、またもや、戦時中の国策で、東海道線と中央線をつなぐ路線である飯田線として改名され、国鉄に買収されてしまった。観光路線どころか戦時下には貨物列車中心の鉄道に変質してしまい、公園も農地化されてしまった。私鉄としてのパワーはそがれ、地域リーダーたちの観光路線の夢は打ち砕かれてしまった。当時の先駆者たちの構想がいかに先駆的であったかは、いまの飯田線と豊川駅を見ると反面教師として思い知らされる。

なお、ターミナル駅として誕生した先駆的な豊川駅は、戦後それなりの機能を果たしていたが、建物の老朽化で建て替えられた。しかし、パイプ構造の無機質な建物の新たな出現に、何人も寄り付きたくない駅に変わってしまい、かつての鉄道と駅をめぐる知恵の気配は見事に消え、義塾出の指導者たちが見ようとしたロマンは見えなくなってしまった。

4. 愛知大学の開学と林毅陸

(1) 愛知大学設立へむけて

最後のトピックスは戦後開学した愛知大学と義塾とのつながりである。

愛知大学は、1901年に上海に開学した東亜同文書院(のち旧制大学)が終戦後日本へ引揚げ、豊橋の予備士官学校の後地へ1946年11月15日に開学した。この1年前の1945年には、最後の書院大学長であった本間喜一は、日本の敗戦を予期した機転で、上海の本校の一部を富山県呉羽紡績工場(この時期には飛行機の本製プロペラ生産)に分けて呉羽校舎とし、日本からの新入学生用にここを呉羽分校として開学し、入学させて

いた。戦後も当時の吉田茂外務大臣の承認で東亜同文書院大学はこの呉羽の地で存続しはじめていたのである。ただし、上海の書院本体である本校は、終戦直後に民国側に接收された。しかも、戦時中、総理大臣を務めた近衛文麿は、終戦直後の年末に東京裁判で呼び出された夜、服毒自殺をしたため、近衛文麿が会長役として就任していた書院の経営母体である東亜同文会は、GHQの手で閉鎖され、それによって財政基盤を失った東亜同文書院大学は呉羽の地で閉校とせざるをえなくなった。それを知った上海にいた本間学長は分校教授会へ新たなキャンパスを探すように連絡し、分校の神谷教授は愛知県出身で、愛知県の様子も知っていたため、豊橋にあって空襲を受けていなかった豊橋予備士官学校が使えることを知り、名古屋の管理局と交渉、ほかからの借用希望もある中、何とか交渉を成立させ、手に入れた。

こうして当初の愛知大学は、戦時中の学徒出陣で繰り上げ卒業や、卒業できなかった東亜同文書院大学生の受け入れ大学としての設置が目指された。本間喜一は第1次大戦後のドイツに留学し、猛烈なインフレ下での生活体験を踏まえ、敗戦時の上海での混乱期に、貨幣を金の延べ棒やガソリン、食糧や物品などに換え、帰校してくる学生や教職員の財政を工面し、また引き上げ時には、書院生の学籍簿や成績簿を分担して帰国するという機転を利かせた。そのため終戦の翌昭和21年3月には関係者とまとまって帰国でき、東京で、さらに創設地となる豊橋でさっそく新大学の構想とその実現に着手した。そして何とこの8月半ばには愛知大学設立計画が文部省で早々と内定され

た。最後の東亜同文書院大学の学長であった本間喜一は当然新大学設立の中心的リーダーであった。帰国するや新大学構想をふくらませ、教員人事を書院との継承を図りつつ、当時の旧制大学設置の高いレベルを意識しながら、外地にあった京城帝大や台北帝大などの優れたスタッフも新法経学部へ登用し、新たなキャンパスとなる豊橋市当局と地元財界の絶大な支援を取り付けた。予備士官学校の建物は荒れており、その校舎への改装の寄付も地元へ求め、市や篤志家などから、2億円ほどの寄付を得た。そして、前述したように新取の気性に富んだ地元経済界の指導者たちからも受け入れられ、また、彼らの多くが義塾で学び、義塾と強い関係を持っていたことを知った。

(2) 初代学長、林毅陸の就任

ところで、GHQ支配下の新大学設立も簡単ではなかったはずである。中国帰りの経過を持つ新大学はGHQの監視対象になったはずで、当然、新たな大学像をどう作るかが大きなポイントであった。

この新たな大学像づくりについては、書院の閉学処理や、引き続きの新大学設立構想の策定のための人事など、多忙を極めた本間学長一行には大きな時間的余裕はなかったものと思われる。しかし、本間学長がまだ敗戦直後の上海にとどまっている段階において、前述した呉羽分校の教員スタッフたちによる閉学後の分校での教授会が存続され、戦後における新しい大学のあり方に対する熱心な議論と記録が蓄積されていた。この点でも呉羽分校設置は、本間学長の先見力が生かされたといつてよいだろう。そこでのテーマは、残された分校教授会の記

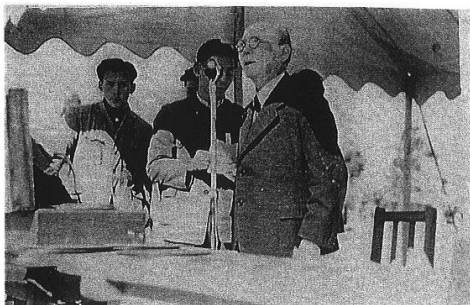
録によれば、その骨格は「世界平和を目指す新たな大学づくり」にあった。これこそ、新大学設立の基本理念になったものであった。これを踏まえ、新大学設立の目的(趣旨)は、その基本理念のもと「国際的教養人の養成」と6大都市以外の初めての地方都市・豊橋への立地を踏まえた「地域文化への貢献」がうたわれることになった。GHQはその支配下で、日本人を日本4島に閉じ込めるいわば鎖国政策を打ち出しており、この「国際教養人の養成」趣旨は日本人を閉じ込める政策には相反する内容であったはずである。それを堂々と掲げた背景には、「東亜同文書院大学」からの伝統とその誇りへの分校長以下の教授会の矜持があったといえる。

そして(旧制)新大学の以上の設立趣意書の目的にふさわしく、実践が可能な代表としての実績ある学長が必要だったといえる。

最後の学長で、新大学を構想し、実現に踏み出した本間喜一学長は、法律家であり、弁護士でもあったことから、学長任期中に不本意にも学生たちを学徒出陣に送り出した反省から、法律家として、初代については新学長就任を遠慮し、小岩井教授も就任を拒んだ。そのような状況下で、本間学長の新大学にふさわしい新学長選びは冴え、新たに義塾系の林毅陸を候補に挙げた。それは林が本間と同じ法学者で、併せて枢密顧問官

や衆議院議員も務めた政治家であり、国際的外交史研究の第一人者の歴史家でもあった。しかも慶應義塾長である大学学長として就任した経歴を持っており、三田キャンパスの改造や日吉キャンパスへの拡大という大学経営の経験も持っていた。そしてさらに膨大な外交史研究第一人者としての成果は新大学の設立趣旨を宣言する指導者としてまさにふさわしい人物に合致していたからである。また、林は東亜同文会の理事という点で東亜同文書院大学ともつながっていた。しかし、すでに高齢でもあった林は、本間からの申し出を繰り返し断った。そのような林に対して、本間は書院生500人余りが学業半ばで中国で待機しており、帰国しても落ち着き先がないこと、そのような事態を招いた東亜同文会の理事としての林の責任も問いかげながら、その緊急の解決を目指した学長就任を説得した。

結局、林は本間の熱意に打たれて初代愛知大学の学長就任を受け入れた(写真G)。掲げられた新大学の設立趣意書の内容には、林毅陸が改めてその理念に賛同し、発展させようとする気合が沸いたはずである。林は学長を引き受けた以上は、十分力を発揮したいと明言し、折からの民間などからの寄付金集めには、自からも率先して乗り出し、そのさい、自分は慶應義塾の名を出さず、愛知大学の名を前面に出して寄付金集めを心掛けたいとして発言している。とはいえ、林が慶應義塾の関係者であることは広く知られており、林教授の講義を受けたという地元の義塾卒業生もいて、地元の義塾系の財界人からはスムーズに受け入れられていった。本間にとって林の初代学長就任についてはは願ってもない最高の人事



愛知大学創立一周年記念行事
(1947年11月12日)(写真G) 運動会開会挨拶する初代学長
林毅陸氏(正面)

になったと思われる。林毅陸の『生い立ちの記』には本間がその思いでと弔辞や思い出の記事を寄せており、そのような経過がうかがわれる。

このように、戦争直後の旧制愛知大学の創設にあたっては、最後の東亜同文書院学長本間喜一の先見性と機転から、義塾出身の国際外交史研究の第一人者である林毅陸が初代学長となり、戦後の日本の大学の在り方を目指し「平和国家の建設」という、東亜同文書院呉羽分校教授会の議論を踏まえた新大学の設立趣旨に対応し、創設を実現し、1946年11月16日に、天皇による（旧制）愛知大学設置認可の裁可印を受けるに至ったのである。

そしてまた、豊橋での愛知大学の開学については、地元財界や教育界に義塾関係者による先駆的事業を通しての義塾との一体感があり、そのような雰囲気をも本間喜一が感じ、塾長経験者である林毅陸に豊橋での初代学長として違和感を感じさせない舞台をつくったともいえた。

5. おわりに

以上、開設されてまもない「福澤諭吉記念・慶應義塾史展示室」を見学した際に筆者の頭をよぎった色々な点と線のつながりから、義塾と東三河とのかかわりを思いつつ描いてみた。

福澤諭吉が開塾して日本の近代化を啓蒙した動きは、塾生たちの手によって各地に展開するが、東三河地方もそれに大きく影響を受けた地域であったと言えた。本稿ではそれを「宝飯中学校の開設」、「豊川鉄道の解説」、そして戦後すぐに誕生した「旧制愛知大学の誕生」を事例として取り上げて論

考した。

阿部泰藏が義塾を卒業したのちに東三河へ帰郷した1881年以来、そして阿部の教示を受けて「宝飯中学校」が地元の政財界のリーダーや住民の力で開設されて以来、今日まで140年あまりの時間が流れた歴史がある。「宝飯中学校」設立の発端はこの地域の指導者や住民に新たな時代の到来を感じさせたし、それが国によってつぶされた後もその志は消えることなく私鉄の「豊川鉄道開通」として開花し、継承された。そこに描かれ実現した夢は全国でも先駆的な事業であった。しかし、その先に実現した「三信鉄道開通」も戦時中の国鉄への吸収でつぶされたものの、そのエネルギーは戦後の東三河の開発構想のエネルギーに集約され、三河港の開設、豊川用水の開通、宇連ダムの建設、そして現在建設中の設楽ダムにもつながっている。地域の指導者たちが自力で議論し、自力で構想し、着手するいわば福澤の「独立自尊」の精神が、義塾とは直接的には無関係な東三河の指導者や住民の間にも、それまでの自立主義的思考の伝統をベースに継承されているように見える。今日なお民間自力の議論が活発で、今日なお2紙が地域紙として発行されている背景にもなっているといえる。

そして最後が愛知大学の創設への義塾のかかわりである。これは筆者にとってすぐに思いついたわけではなかったが、それまでの地域の歴史と義塾とのかかわりを検討しながら、思い至った点である。それは開学の趣旨と林毅陸初代学長就任の関係について思いめぐらす中で、最後の東亜同文書院大学学長本間喜一がどうして林毅陸にこだわったかを検討する中で、本間の先見性が

またもや発揮されたはずであること、義塾の展示室を見つめ、福澤諭吉亡き後、まさに林毅陸が義塾の「中興の祖」にふさわしく取り上げられていることに示されるように、本間喜一もすでに戦前から東京の帝大や商大以外にも有力大学の講師などを務める中で、林毅陸に注目する評価を持っていたのではないかということである。それは上海から東京へ帰国後、新大学設立構想をめぐり、呉羽校舎の教授会の構想内容を知り、また新キャンパス地となった豊橋市の市長や幹部、特に経済界のリーダーたちとの接触の中で、彼らや東三河地域が義塾とのつながりの強い土地柄であることを知ったことから、林毅陸を愛知大学の設立趣旨に最もふさわしい学長人物として選ぶべき直感を得たのではないかと思われたからで、その裏づけの関連資料を検討し、間接的ながらその思いを強くした。したがって、旧制愛知大学の発足には義塾の精神も加わっていたことができる。

いずれにせよ、愛知大学の示す世界と地域の両視点を持つ設立趣旨とその理念は、今日なお愛知大学の基本柱になっており、卒業生たちも高く評価している。それは140年あまり前に、宝飯郡に広げられた福澤精神の東三河への拡散から始まり、それがこの地域の根底になお継承されているということをも物語っている。

(参考文献)

- ・愛知大学五十年史編纂委員会 (2000) 『愛知大学五十年史』、愛知大学。
- ・愛知大学大学同窓会創立 55 周年記念誌編集委員会 (2007) 「学生たちの証言で綴る創世記—愛知大学同窓会 創立 55

周年記念誌—』、愛知大学同窓会。

- ・和木康光 (2012) 『知を愛し人を育み—愛知大学物語—』、中部新聞経済社。
- ・藤田佳久 (2012 初版) 『日中に懸ける—東亜同文書院の群像—』、中日新聞社
- ・藤田佳久 (2021) 「創設期の愛知大学卒業生に関する調査報告—「旧制愛知大学法経学部」、「新制愛知大学法経学部・文学部」の卒業生たち—」、『同文書院記念報』 Vol.29。
- ・近藤恒次 (1979) 『時習館史—その教育と伝統—』、時習館高等学校。(宝飯中学校史についての初の論考あり)
- ・桜が丘ミュージアム (2019) 『三河ではじめての中学校 宝飯中学校』、豊川市桜ヶ丘ミュージアム。
- ・豊川市史編纂委員会 (2007) 『新編豊川市史、第 3 巻』、豊川市役所。(宝飯中学校、豊川鉄道史への論考あり)
- ・豊川市史編纂委員会 (2001) 『新編豊川市史、第 4 巻』、豊川市役所。(豊川鉄道の変遷への論考あり)
- ・慶應義塾編纂 (1932) 『慶應義塾七十五年史』、慶應義塾刊。(序文は林毅陸、日吉校地予定地の図もあり)
- ・林毅陸 (1954) 『生立の記—林毅陸手記—』、林喜八郎刊。(本間喜一による林毅陸学長への弔辞と憶い出の文章あり)
- ・林毅陸「福澤先生と教育」、林毅陸 (1933) 『弘堂講話集』、所収。
- ・林毅陸 (1947) 『欧州最近外交史』、慶應出版社
- ・林毅陸 (1926) 「三田丘上の復旧及整理」、『三田評論』 348 号。
- ・林毅陸 (1933) 「国家の独立自尊」、『三田評論』、432 号。

- ・林毅陸 (1933、1934、1935)、『近世外交史、(上、中、下)』、叢文閣。
- ・林毅陸他共著 (1935)『最近世界の外交』、章華社
- ・林毅陸 (1947)「最近外交史」、慶應出版社。
- ・藤田佳久 (2015)「本間喜一一東亜同文書院大学・同呉羽分校、そして愛知大学

一」、愛知大学東亜同文書院大学記念センター主催 2015 年度シンポジウム『海外からの大学引揚げをめぐる問題とその位相—東亜同文書院大学から愛知大学への人事的接合性と自国文化への接合一』。